

路傍の草

寺田寅彦

青空文庫

一 車上

「三上」^{さんじょう}という言葉がある。枕上^{ちんじょう}鞍上^{あんじょう}廁上^{しじょう}合わせて三上の意だという。「いい考えを発酵させるに適した三つの環境」を対立させたものとも解釈される。なかなかうまい事を言ったものだと思う。しかしこれは昔のシナ人かよほど暇人でないと、現代では言葉どおりには適用し難い。

三上の三上たるゆえんを考えてみる。まずこの三つの境地はずれも肉体的には不自由な拘束された余儀ない境地である事に気がつく。この三上に在る間はわれわれは他の仕事をしたくてもで

きない。しかしながら見ると非常に自由な解放されたありがたい境地である。なんとなればこれらの場合にわれわれは外からいろいろの用事を持ちかけられる心配から免れている。肉体が束縛されているかわりに精神が解放されている。頭脳の働きが外方へ向くのを止められているので自然に内側へ向かつて行くせいだと言われる。

現代の一般の人について考えてみるとこの三上には多少の変更を要する。まず「枕ちんじょう上」であるが、毎日の仕事に追われた上に、夜なべ仕事でくたびれて、やつと床につく多くの人には枕上は眠る事が第一義である。それで眠られないという場合は病気なのだからろくな考えは出ないのが普通である。

「廁上」のほうは人によると現在でも適用するかもしない。自分の知っている人の内でも、たぶんそららしいと思われるほど長時間をこの境地に安住している人はある。しかし寝坊をして出勤時間に遅れないよう急いで用を足す習慣のものには、これもまた瞑想に適した環境ではない。

残る一つの「鞍上」はちょっとわれわれに縁が遠い。これに代わるべき人力や自動車も少なくも東京市中ではあまり落ち着いた気分を養うには適しないようである。自用車のある場合はあるいはどうかもしれないが、それのない者にとつては残る一つの問題は電車の「車上」である。

電車の中では普通の意味での閑寂は味わわれない。しかしその

かわりに極度の混雑から来た捨てばちの落ち着きといったようなものがでないでもない。乗客はみんな石ころであつて自分もその中の一つの石ころになつて周囲の石ころの束縛をあきらめているところにおのずから「三上」の境地と相通する点が生じて来る。従つて満員電車の内は存外瞑想に適している。机の前や実験室では浮かばないようないアイデイアが電車の内でひょつくり浮き上がる場合をしばしば経験する。

「三上」の三上たるゆえんの要素には、肉体の拘束から来る精神の解放というもののほかにもう一つの要件があると思われる。それはある適当な感覚的の刺激である。鞍上あんじょうと廁上しじょうの場合にはこれが明白であるが枕上ちんじょうではこれが明白でないよう見え

る。しかしそく考えてみると枕や寝床の触感のほかに横臥のために起ころる全身の血圧分布の変化はまさにこれに当たるものであると考えられる。問題の「車上」の場合にはこの条件が充分に満足されている事が明白である。ただむしろ刺激があり過ぎるので、病弱なものや慣れないものには「車上」の効力を生じ得ない。この刺激に適当に麻痺まひしたものが最もよく「車上」の能率を上げる事ができるものらしい。

二 卓上演説

近年いろいろの種類の宴会で、いわゆるデザートコースに入つ

て卓上の演説がはやるようである。あれは演説のきらいな人間には迷惑至極なものである。せつかく食欲を満足したあとでアイスやコーヒーを味わいかけていい気持ちになつてゐる時分に、これが始まるのである。あまりおもしろくもないあるいはむしろ不愉快な演説を我慢して聞くのはまだいいとしても、時によると幹事とか世話人から「指名」などと言つて無理やりに何かしやべる事を強要される。それでも頑強に応じないと、あとから立つ人の演説の中で槍玉にあげられる。迷惑な事である。

あれはともかくもやはり西洋人のまねから起こつた事には相違ない。不幸にして西洋の社交界へ顔を出した事がないし、出たところで言語がよくわからないから、西洋の卓上演説がどんなにあ

くどいものかばかりしいものかを承知しない、従つて日本の卓上演説との比較も何もできない。

いちばん最初にああいう事を始めた人はどういう人か知らないがおもしろい事を発明したものである。しゃべる事の好きな人が、ごちそうを食つてい氣持ちになつた時分に立つて何かしら警句でも吐いてお客様たちをあつと言わせたりくすぐつて笑わせたりするのはかなりな享楽であろうと想像する事ができる。それにはいわゆるデザートコースにはいつからがきわめて適當な時機であろうという事も了解される。つまり一種の生理的の要求を満足させるための、ごちそうの献立の一つだと思えばいいのだろうと思う。ただ一つ問題になるのは、料理のほうだといやなものは

食わないで済むのに、この演説だけは無理じいにしいられるという事である。

もう一つ問題になるのは、卓上演説があまりはやると、ついつい卓上気分を卓上以外に拡張するような習慣を助長して、卓上思想や卓上芸術の流行を見るようになりはしないかという事である。識者の一考を望みたい。

三 ラディオオービア

初めてラディオを聞いたのは上野のS軒であつたと思う。四五人で食事をしたあと、客室でのんきにおもしろく話をしていると、

突然頭の上でギアーギアーギアーギアーと四つ続けて妙な声がした。ちょうど鶏の咽喉(のど)でもしめられているかというような不愉快な声がした。それから同じ声で何かしら続けて物を言っているようであつたが、何を言つているか自分にはわからないので同行者に聞いてみると「JOAK、こちらは東京放送局であります」と言つたのだそうである。それから長唄(ながうた)か何からしいものが始まつて、ガーガーいう歌の声とビンビン響く三味線の音で、すつかりわれわれの談話は擾乱(じょうらん)されてしまった。

それから後も時々いろいろな場所でこのJOAKに襲われた。

慣れて来ると、なるほどJOAKと聞こえる。ジェーエ、オーオ、エーエ、ケーエイツと妙に押しつけて、そして無理に西洋人らし

くこしらえた声でどなるのがどういうものかあまりいい気持ちがしない。この四つのアルファベットの組み合わせ自身に何かしら不快な暗示を含んでいるのか、それともいちばん初めに聞かされた音の不快な印象が、この音を聞くたびに新しく呼び返されるのかもしれない。

オーケストラも聞いたが、楽器の音色というものが少しも現わされない、木管でも金属管でも弦でもみんな一様な蛙の声のようなものになつて、騒々しくて聞いていられない。

このほうの玄人くろうとに聞いてみると、飲食店や店頭にある拡声器が不完全なためにそういう事になるので、よく調節された器械で鉱石検波器を使ってそして耳にあてる受話器を使えばそんなこと

はないそうである。しかし頭へ金属の鉢はちまきをしてまでも聞きたいと思うものはめつたにないようである。

夏休みのある日M君と二人で下高井戸しもたかいどのY園という所へ行つて半日をはなはだしくのんきに遊んで夕飯を食つた。ちょうど他には一人も客がなくて無月の暗夜はこの上もなく閑寂であつた。飯がすんでそろそろ帰ろうかと思つていると、突然階下でJOAKが始まつた。こんな郊外までJOAKが追い駆けて来ようとは思わなかつたのであつた。その晩はちょうどトリオでチャイコフスキーキーの秋の歌などもあつた。周囲が静かであるためか、それとも器械がいいのか、こちらの頭がどうかしていたのか、そのトリオだけはちょっとおもしろく聞かれたので、階段の上に腰かけてお

しまいまで聞いた。このぶんならラヂオもそれほど恐ろしいものではないと思った。

その後ある休日の午後、第Xシンフォニーの放送があつたとき、銀座のある喫茶店へはいつてみた。やはりだめであつた。すべての楽器はただ一色の雑音の塊かたまりになつて、表を走る電車の響きと対抗しているばかりである。でも曲の体裁を知るためと思つて我慢して聞いていると、店員が何かぐあいでも直すためか、プラグを勝手に抜いたりまたさしたりするのでせつかくのシンフォニーは無残にもぶつ切れになつてしまつた。

こんな行きがかりで自然ラヂオというものに対する一種の恐れをいだくようになつてみると、あの家々の屋上に引き散らした

アンテナに対しても同情しにくい心持ちになる。しかしそういう偏見なしにでもおそらくあれはあまり美しいものではない。物干しづおのようなものにひょろひょろ曲がった針金を張り渡したのは妙に「物ほしそう」な感じのするものだと思う。あんなことをしないでもすむ方法はあるそうである。

ラディオをいじくつているうちに自分で放送がしたくなつて来て、どうどういたずらの放送をはじめ、見つかってしかられた人がある。しかしこういう人はたのもしいところがある。

現象の本性に関する充分な知識なしに、ただ電気のテクニツクの上皮だけをひとわたり承知しただけで、すっかりラディオ通になつてしまつたいわゆるファンが、電波伝播でんぱでんぱの現象を少しも不思

議と思つてみる事もなしに、万事をのみこんだ顔をしているのがおかしいと言つた理学者がある。しかし考えてみると理学者自身もうつかりすると同じような理学ファンになつてしまふ。相対性理論ファン、素量説ファンになる恐れが多分にある。これは警戒すべきことである。

四 侵入者

郊外の田舎いなかにわずかな地面を求めて、休日ごとにいい空気を吸つて頭を養うための隠れ家を作つた。あき地には草花でも作つて一面の花園にして見ようという美しい夢を見ていたが、これはほ

んとうの夢である事がじきにわかつた。せつかく草花の芽が出るところになると、たぶん村の子供らであろうが、留守番も何もない屋敷内へ自由にやつて来て、一つ残らずむしり取り、引っこ抜いてしまう。いろいろの球根などは取るのにも取りやすいわけだが、小さな芽ばえでもたんねんに抜いてそちらに捨ててある。どうかすると細かく密生した苗床を草履ぞうりか何かですりつぶしたりする。

すっかり失敗した翌年は特別な花壇を作る代わりにところどころ雑草の間の気のつきにくそうな所へ種をまいたり苗を植えたりしてみたがやはりだめであつた。だれとも知れぬ侵入者は驚くべき鋭敏な感覚で、宝探しでもするような気で捜し出すと見えて、ほとんど残りなしに抜き取つてしまうのである。たとえば向日葵ひまわりや

松葉牡丹まつばばたんのまだ小さな時分、まいた当人でも見つけるのに骨の折れるような物影にかくれていてるのでさえ、いつのまにか抜かれているのに驚いた。これほど細かい仕事をするのはたぶん女の子供らしい。ある時一人で行っていた時、庭のほうで子供の声がするのでガラス越しに見ると十三歳ぐらいをかしらに四五人の女の子が来て竹切れで雑草の中をつついている。自分のいるのに気がつくとお互いに顔を見合せたきりで、別に驚いたふうも困った様子もなくどこかへ行ってしまった。

ところがおもしろい事にはこれらの侵入者が手をつけないで見のがす幾種類かの草花がある事を発見した。それはコスモスと虞ぐ美人草びじんそうとそして小桜草こざくらそうである。立ち葵あおいや朝顔などが小さな

二葉のうちに搜し出されて抜かれるのにこの三種のものだけは、どういうわけか略奪を免れて勢いよく繁殖する。二三年の間にはすっかり一面に広がつて、もうとても数人の子供の手にはおえないようになつてしまつた。これらの花が土地の子供に珍しくないせいかとも思つてみたが、事実はこれに相当しない。少なくも虞美人草はこのへんの民家の庭にあまり見受けなかつた。そしてこの土地に珍しくない日々草にちにちそうなどがかえつてたんねんに抜き去られた。また一方珍しくないコスモスは取られないほうに属していた。

あるいはこの三つの植物の繁殖力の旺おうせい盛せいな事に関する侵入者の知識がこの現象の原因になるかと思つてみたが、それもあまりに付会に過ぎた説明としか思われない。

いろいろの花がいろいろの蝶や虫を引きつける能力についてはまだおそらく人間の知らない不思議な理由があるだろうと思うが、同様にいろいろの草花が子供の略奪趣味を刺激する効果の差別についてもまだ簡単な説明を許さない秘密な方則が伏在しているのではないかと思う。

昆蟲こんちゅう

あり

の研究者が蝶や蟻ありでも研究するように、この小略奪者たちの習性を研究する目的でいろいろの実験をしてみればきっとおもしろくまた有益だろうと思うが、自分にそれほどの暇も熱心もない。ただもう一二年たつて、われわれ「東京者」に対する子供ら的好奇心と反感のずっと減少した時分にもう一ぺん「花園の夢」を見るのもいいかと考えている。

五 草刈り

屋敷内に草一本ないという自覚を享樂するために、わざわざ人を雇つてまでも裏庭のすみずみまできれいに草を取つてしまふ人がある。こういう人の心持ちが少なくも子供の時分にはわからなかつた。なぜ草がはえていてはいけないかどうしても了解できなかつた。およそ地からはえ出る植物に美しくないと思うものは一つもなかつた。せつかくはえたものをむざむざむしり取るのが惜しいと思われた。きゆうじょうし 旧城趾やその他の荒れ地に勢いよく茂つた雑草は見るから気持ちがよかつた。そういう所にねころんで鳥の

歌、蜂^{はち}のうなりを聞くのは愉快であつた。油絵の風景画などでも、破れた木柵^{もくさく}、果樹などの前景に雑草の乱れたような題材は今までいちばんに心を引かれる。

東京に家を持つてからの事である。ある日巡回がやつて来て、表の垣^への下にひどく草がはえているから抜くようにと注意して行つた。見るとなるほど、黒い朽ちかかつた板垣の根にいろいろの草が青々と茂つて、中には小さな花をさかせているものもあって、別にきたならしくもなんともなかつた。おそらく板垣よりもその前のどぶよりもこの草がいちばん美しいものとしか思われなかつたが警察官のいう事であるからそのとおりにむしり取つてしまつた。

人並みに草花などの種を自分でまいてみると、はじめて雑草の不都合な事が少しづかって来るような気がした。打つちやつておくと、せつかく生長させようと思う草花がすつかり負かされてしまうので、こうなると氣の毒でも雑草のほうはむしるよりほかはない事になる。雑草という言葉の意味が始めてわかつて来る。

郊外に家をこしらえた。春さきから一面にいろいろの草がはえる。中には花が咲きそろうとかなり美しいのもある。しかしまだ途方もなく延びてしまつて歩く事の邪魔になるのもある。かまわず打つちやつておくとおしまいには家の内までも侵入しそうな勢いを示して来る。こうなるとさすがに雑草の脅威といつたようなものを感じて、とうとう草刈りをはじめる決心をした。

草刈り鎌がまにいろいろの種類のある事を知ったのはその時である。鎌の使い方、鎌のとぎ方も百姓に伝授を受けていよいよ取りかかつた。

刈り始めてみるとなかなか骨が折れる。よっぽど刈つたつもりでも、立ち上がつて見ると手のひらぐらいしか進行していないのにがつかりした。しかしやつているうちにだんだん草を刈つている事自身の興味がわかつて来て、刈つてしまふ結果をあせる気がなくなつて来るのを感じた。

よく切れる鎌で難ないで行くのは爽快そうかいなものである。また草の根をぶりぶりかき切るのも痛快なものである。かゆい所をかくような気がする。

いろいろの草の根の張り方にそれぞれ相違のある事にも気がつく。それらの目的論的の意義を考えてみるのもなかなかおもしろい。同じ面積を、時季によつてちがつた雑草が交代して占有する順序もおもしろく、年によつて最もよく繁殖する草の種類を異にする事や、それが人間の干渉によつて影響される模様や、少し立ち入つて研究したら一種の「雑草学」が成り立ちそ�である。それを書くときりがなくなるからここには略する。ただ一つ頭に刻まれた問題だけを簡単に書き止めておく。

雑草の内にはわれわれの栽培している五穀や野菜や観賞植物とよく似通つたものがはなはだ多い。もしこれらの雑草を特にかわいがつて培養し教育して行つたら、何代かの後にはかえつて現在

の有用植物よりももつと有用なものができうる可能性はないものだろうか。

長い間人間の目の敵にされて虐待されながら、頑強な抵抗力で生存を続けて来た猫草相撲取草などを急に温室内の沃土に移してあらゆる有効な肥料を施したらその結果はどうなるであろう。事によると肥料に食傷して衰滅するかもしれない。貧乏のうちは硬骨なのが金持ちになつて急に軟化するようにもかくも軟化しそうである。そのかわりそれらの草の実がだんだん発育進化して米や麦よりもいいか、あるいは少なくも同等な穀物になりはしないか。

もし培養のしかたによつて、頑強な抵抗力は保存し、しか

も実の充実を遂げる事ができればなおさら都合がいい。そういう事は望まれない事であろうか。

だれか、だまされる氣でこの実験に取りかかつてみる人はないものであろうか。

六 薙が真綿になる話

わら
袞にある薬品を加えて煮るだけでこれを真綿に変ずる方法を発明したと称して、若干の資本家たちに金を出させた人がある。ところがそれが詐偽だという事になつて検挙され、警視庁のお役人たちの前で「実験」をやつて見せる事になつた。半日とか煮てパ

ルプのようなものができた。翌朝になつたら真綿になるはずのがとうとうならなくて詐偽だと決定した。こんな話が新聞に出ていたそうである。新聞記事の事だから事がらの真相はよくわからぬい。ただこれに似た事があつたらしい。

こういう現象は古今東西を問わずよくある事である。何かしらうまい神秘的な金もうけはないかと思つて捜している資本家の前に、その要求に応じて出現するものである。悪魔でも呼び出さない人の前にはそう無作法には現われない。

欺くほうもあまりよくはないが、欺かれるほうもこの現象の一原因としての責任はある。もし現代の科学を一通り心得た大岡越前守がこの事件を裁くとしたら、だまされたほうも譴けん

責^{せき}ぐらいは受けそうな気がする。

しかしそんな事は自分の問題ではない。ただちよつと考えてみたくなる事が一つある。

警視庁で実験をやり始め、やりつつある間のその人の頭の中にどんな考えが動いていたかという事である。たとえそれまではパルプと真綿をすりかえる手品をやつていたに相違なくとも、その時には、やつているうちに、もしかするとほんとうにパルプが真綿に変わるかもしないという不可思議な気持ちを、みずからつとめて鼓舞しつつ、ビーカーの中をかき回していたのではないかという疑いである。

やつているうちに立ち会い役人の目を盗んですりかえようと思

つたのだというのは最も常識的な解釈で、それを否定する事はむつかしい。しかしあとそれだけであつたかどうかが問題である。

うそもしょっちゅうついているとおしまいには自分でもそれを「信じる」ようになるというのは、よく知られた現象である。いろいろな「奇蹟」^(きせき)たとえば千里眼透視術などをやる人でも、影にかくれた助手の存在を忘れて、ほんとうに自分が奇蹟を行なつているような気のする瞬間があり、それが高じると、自分ひとりでもそれができるような気になる瞬間もありうるものらしい。幾年もつづけてジグスとマギーをかいている画家は、おしまいには生きたジグスとマギーの存在を信じて疑わなくなるだろうが、それと似た頭の迷いが起こりはしないか。

ビーカーのパルプが真綿に変わるまでの途中の肝心の経路も考え方によつては、ほんのちよつとした事のように思われるかもしない。そのちよつとのところに目をふさいで見れば、確かに藁が真綿になるに相違ないのである。山の芋うなぎが鰻わらになつたりする「事實」も同様である。だんだんにこの「事實」に慣れて来ると、おしまいには、そのいわゆる「ちよつとした」経路を省略しても同じ事になりそうな気がするものではあるまいか。頭の冷静な場合にはそんな事はないとしても、切迫した事態のもとに頭が少し不透明になつた場合には存外ありそうな事だと思う。

この事件は見方によつては頭のよくない茶目のいたずらとも見られる。しかしながら犯罪心理学者の研究資料にもなれば、科学的

認識論の先生が因果律の講釈をする時の材料にもなりうる。

因果をつなぐかぎの輪はただ一つ欠けても縁が切れる。この明白な事をわれわれはつい忘れたりごまかしたりする事がある。われわれの過失の多くはここから来る。鉄道や飛行機の故障などもこういう種類に属するのが多い。綱紀紊乱風俗廃頽などという現象も多くはこれに似た事に帰因する。うつかりこの下手な手品師を笑われない。

(大正十四年十一月、中央公論)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第一巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波
書店

1947（昭和22）年9月10日第1刷発行

1964（昭和39）年1月16日第22刷改版発行

1997（平成9）年5月6日第70刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

路傍の草

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>